

瘞紅碑解読

——尾道千光寺——

賴 多万

はじめに

尾道千光寺玉の岩陰にある「瘞紅碑」は、天保甲午五年（一八三四）に建立された。瘞紅すなわち紅（花）を瘞めるといふ風流な行いをしたのは、豊後竹田の文人・田能村竹田である。この年二月二日から尾道に滞在していた竹田は、自分の目を楽しませた梅から石榴に至る花々の枯れ枝を棄てかね、文人仲間とそれらに酒をそそいで詩を作り葬った。尾道の橋本竹下・菊淡小史・龜山夢研がその仲間である。この碑には、竹下の七言古詩、竹田の七言律詩、菊淡小史の七言絶句、夢研の詞「江城子」が刻されている。

建立されてから百八十年の歲月は碑文をすっかり風化させ、解読は困難を極めた。現在の碑の写真と、賴山陽史跡資料館に残る拓本が手がかりであった。この拓本は戦後まもなく尾道短期大学の学長であった賴成一氏の手になるものと推察されるが、それも建立後百年以上経過した後のもので、不鮮明なものであった。

資料として竹田には『田能村竹田資料集・詩文篇』⁽¹⁾、

竹下には詩集『竹下詩鈔』⁽²⁾が残されているが、他のふたりは、碑文のみがたよりであった。碑文には、各人が書いたそのまゝの字体で刻されており、菊淡小史は楷書であったが、夢研の方はきわめて難解な草書であった。

一 橋本竹下の詩

橋本竹下（一七九〇～一八六二）、名は旋、字は元吉、通称は吉兵衛。尾道の豪商で屋号は灰屋。四十五歳。賴山陽の友人として、庇護者として有名であったが、この時は山陽の死の二年のちである。

花之親人是瓶花
簾前侍立似嬌娃

花の人に親しむは是れ瓶花、
簾前侍りて立つは嬌娃に似たり。

自將開落付君手
獻媚肯向別人家

自ら開落を將て君が手に付し、
媚を獻じ肯へて向かふ別人の家。

常看世間輕薄兒

常に看る世間の輕薄兒、

青錢擲下買花枝」
花未全萎拌藩溷

②青錢擲げ下し 花枝を買ふ。
花未だ全く萎まざるに 藩溷に
拌て、

餘芳長抱終古恨」
才子憐花思匪夷
花亦相依如于綿

餘芳 長へに抱く 終古の恨み。
才子 花の 匪夷を思ふを憐れみ、
花も亦た相依りて 于に帰ぐが
如し。

朝々分與滿瓶水
每枝一老魂一飛」

朝々分ち與ふ 滿瓶の水、
枝一たび老ゆる毎に 魂一たび
飛ぶ。

乃聚枯藁手自束 ⑤

乃ち 枯藁を聚め 手自から束
ね、

⑦廿四番名仔細錄
詩人会葬古道場
縱不玉棺死非辱」

廿四番名づけて 仔細に錄す。
詩人会し葬る 古道場、
縱ひ 玉棺ならずとも 死 辱
むるに非ず。

⑧詩淚洒成瘞紅篇
玫瑰三尺白戕然
果是芳魂得解脫

詩淚 洒し成る 瘞紅の篇、
玫瑰 三尺 白 戕然。
果して是れ芳魂 解脫するを得
ん、

淨土重開五色蓮」

淨土 重ねて開く 五色の蓮。

竹下旋

花が人に親しむのは 瓶の花としてである、すだれの前に
に そそと立つさまは美人のようだ。花は開くも散る

もすべてあなたまかせて、懸命に美しい姿を見てもら
おうと思つても、あなたは他所の家に向かわれるので
すか。よく見るのは 世間のばかなやつらが、小錢を投
じて花の枝を買うこと。花がまだ全部萎まないのに、
垣根のかわやに捨て、残り香はいつまでも永遠の恨み
を抱く。才子は 花の思いが尋常ではないことを可哀想
に思い、花もまたたよりにしてここに嫁ぐかのようだ。
朝ごとに瓶いっぱいの水を分け与え、枝が一たび老い
るごとに、魂が一たび飛ぶ。そこで枯れ枝を集め自
分の手で束ね、二十四番名づけて こまごまと記録し
た。詩人があつまり 古いお寺に葬る、たとえ 玉の棺
でなくとも、死を 辱めていたのではない。こぼれ
る詩人の涙が「瘞紅の篇」となり、三尺の美玉は 白
く高い。きつと花の魂は 解脫することができらだろ
う、淨土に またもや 五色の蓮の花が開く。

『竹下詩鈔』には、「竹田翁平日好貯瓶花寓我尾道
殆十旬從梅花到石榴花遞挿無虛日頃聚數十種枯枝瘞之
千光寺庭隅會諸友酌酒作瘞紅歌雕之於石龜伯秀及余詩
亦併附其末云」（竹田翁平日瓶花を貯ふるを好む。我が
尾道に寓すること殆ど十旬、梅花より石榴花に到るま
で遞挿すること虚日無し。頃、数十種の枯枝を聚め之
を千光寺庭隅に瘞め、諸友を會し酒を酌いで瘞紅の歌
を作る。之を石に雕り龜伯秀及び余が詩も亦た併せて
其の末に附すと云ふ。）の序文がある。

①「嬌娃」美人。②「青錢」青銅の錢。③「藩溷」垣根の隅に有る便所。④「匪夷」「夷」は「葬」に通じ「匪葬」とは、常道に反すること。非道。⑤「手自束」「竹下詩鈔」は「手親束」に作る。⑥「枯蘂」枯れ枝。⑦「廿四番名」「竹下詩鈔」は「番番春風」に作る。⑧「詩淚」「竹下詩鈔」は「淚痕」に作る。⑨「玫瑰」美玉の名。『竹下詩鈔』は貞珉に作る。⑩「戔然」高いさま。

二 田能村竹田の詩

田能村竹田（一七七七—一八三五）、名は孝憲、字は君彝、通称は行藏。この時五十八歳。豊後岡藩士。頼山陽の親友。画業とともに填詞にも秀でていた。翌年には没する。

芳魂葬處草芊綿
粉盡紅消風悄然
身後自今三尺石
生前憶昨半瓶泉
幸教名士鐫佳句
喜向禪門寄墓田
休笑囊空無酒酌

芳魂葬る處草^{①せんめん}芊綿、
粉盡き紅消え風悄然。
身後^{さく}自今三尺の石、
生前^{さく}昨を憶ふ半瓶の泉。
幸に名士をして佳句を鐫らしめ、
喜びて禪門に向かひ墓田に寄す。
笑ふを休めよ囊^{のう}空しく酒の酌^{そそ}
ぐ無きを、
朝来醸^くし得て青錢有り。

竹田憲

花の魂を葬るところは草あおお、おしろいも尽き紅も消え風はものさびしい。今日からは死んだ後に三尺の石に葬られるのだが、昨日までは半瓶の泉に活かされていた。さいわいに名士たちに佳い句を彫らせ、喜んで禪門に向かい墓地に集まった。笑わないでくれ袋は空でそそぐ酒が無いなどと、朝から集めて小錢があるのだよ。

①「芊綿」青々としてつらなるさま。②「粉」化粧。③「悄然」ものさびしいさま。④「墓田」墓場にする地。⑤「醸」金銭をつる。

『田能村竹田資料集』詩文篇には「天保甲午八月朔埋瓶花枯枝一束於黃薇玉浦之千光寺側謀立斯石各錄詩若詞代銘」（天保甲午八月朔、瓶花枯枝一束を黃薇玉浦の千光寺側に埋め、謀りて斯の石を立て、各の詩若しくは詞を録し銘に代ふ）の序文がある。この文は瘞紅碑の最後に刻されている。

三 菊淡小史の詩

菊淡小史は、高橋七郎右衛門。『芸藩輯要』⁽³⁾によると、「郡町扶持人（尾道）」とある廣島藩の役人。

寂小墓門臨晚開 寂小の墓門^①晩に臨みて開き、
恰如埋玉向青苔 恰も玉を青苔^②に埋むるが如し。
明朝更写色空語 明朝更に写さん色空^③の語、

爲汝應焚寄夜臺

汝が爲に應に焚きて 夜臺^③に寄す。

菊淡小史估

寂しく小さい墓の門が晩に開き、まるで玉を青^①ごけに埋めたようだ。明朝また色即是空の写経をするとうよう、おまえのためにいまは焚いて墓穴に手向ける。
①「青苔」青^①ごけ。②「色空語」色即是空の語。③「夜臺」墓穴。

四 龜山夢研の詞「江城子」⁽⁴⁾

龜山夢研（二七九七〜一八六三）、名は為綱、字は伯秀、通称は正介、三十八歳。尾道の豪商で屋号は、油屋。父の龜山士綱は菅茶山の弟子で、尾道組頭から年寄をつとめた。

（上片）

滌瓶換水護芳魂

瓶を滌^{あら}ひ 水を換へ 芳魂を護^{まも}る。

抱枝嘆

見花憐

影瘦香裏

春事已闌珊

欲捨未能愛惜別

枝を抱きて 嘆き、

花を見て 憐れむ。

影は瘦せ 香は裏^{うつつ}り、

春事 已に闌珊^{①らんさん}。

捨てんと欲するも 未だ能^{いまだ}はず

愛惜の別れ、

三尺土 葬無棺

三尺の土に 葬るに棺無し。

（下片）

黃泥三尺葬無棺

黃泥^② 三尺 葬るに棺無し。

粉止酸

粉止^ただ酸^③

緑狂歎

緑^④ 狂嘆す。

雨撼風□

雨^⑤ 撼り風□（□は「十扉」）

籬招學纏綿

籬^{まがき}に招き纏綿^⑥を學ぶ。

頼使芳魂飛化蝶

頼^{さいは}に芳魂をして 飛びて蝶と

化せしめ、

来枕土

来たりて土に枕すれば、

入儂眠

儂^{わが}が眠りに入る。

水精簾下龜夢研山人綱

瓶を洗い 水を換え 花の魂を護る。枝を抱いて 嘆き、花を見て 憐れむ。姿は瘦せ 香りは移り、春はすでに盛りを過ぎた。捨てようと思うのだが まだ出来ず 別れを惜しみ、三尺の土に、葬るのに棺は無い。

土の下 三尺に 葬るのに棺は無い。白い花を思い出してはひたすら悲しく、緑の葉を思い出しては狂おしいほど嘆かれる。墓は雨や風にさらされるだろうが、籬に花の魂を招き 花の纏綿たる思いを学びたいものだ。もしさいわいに花の魂を 飛んで蝶と変わらせたならば、私が墓前にやって来て 喪に服するために土を枕にし

たとき、きつと私の夢に出て来てくれるだろう。

①「闌珊」盛りを過ぎて淋しくなるさま。②「黄泥」土のこと。③「酸」俗語。悲しい、或いはみすばらしい。④「雨燃風□」「燃」は、よじる。□字は「十十屏」であるが、「十十屏」ではなからうか。雨風燃濕。雨や風に痛めつけられること。⑤「纏綿」心にまつわって離れないさま。⑥「枕土」喪に服すること。⑦「水精簾」水晶で作った簾、美しい簾。元稹「雜思」詩「閒読道書慵未起、水精簾下看梳頭。」とある。龜山夢研の詞は神田喜一郎博士もその著作の中で「夢研もたしかに填詞を試みたのである。何とかその作品の見つからないものであろうか。」と述べているが、石に刻まれて今に到るまで誰にも気付かれなかったであろう。

おわりに

天保五年八月一日、尾道千光寺玉の岩陰に集まった文人達、竹田と菊淡小史は岡藩と廣島藩の藩士。かたや尾道在住の豪商ふたり、竹下と夢研。枯れ枝に酒をそそぎのおの詩または詞をつくり、花の精をとむらった。それぞれ身分も資力も違う人たちが、文人という名のもと心を通わせ高尚なひとときを持った。

すぐ近くに河東碧梧桐の「瘞紅の碑あるあり、四山眠れるに」という句碑もあるが、この瘞紅碑に気付く人はまれである。百八十年前には説明の必要もないほど身近であった日本漢詩の世界が、今では理解不能の

文学となり、碑とともに朽ち果てようとしている。

注

- (1) 大分県先哲叢書『田能村竹田資料集』詩文篇（大分県教育委員会 一九九二）
- (2) 『竹下詩鈔』爽籟軒藏版
- (3) 高橋新一編『芸藩輯要』人名索引（増訂版）（<http://kelu-cafe.com/geihan.pdf>）
- (4) 「江城子」は詞牌。『詞律』卷二、『欽定詞譜』卷二。唐五代の頃は單調三十五字、七句五平韻だったが、北宋の蘇軾から「双調七十字、前後段、各七句五平韻」の形式が始まる。龜山夢研の「江城子」はこちらの詞型による。
中平中仄仄平平。仄平平。仄平平。中仄中平、中仄仄平平。
中仄中平仄仄。平仄仄。仄平平。
中平中仄仄平平。仄平平。仄平平。中仄中平、中仄仄平平。
中仄中平仄仄。平仄仄。仄平平。（中は可平可仄、太字は韻）
- (5) 『神田喜一郎全集』第六卷（同朋社 一九八五）『日本における中國文学Ⅰ』二十一竹田の餘響

瘞

紅

碑

花之親人是瓶花簾前侍立似嬌娃自將開落付君手獻媚肯向別人家常看世間輕薄兒
青錢擲下買花枝花未全萎拌藩溷餘芳長抱終古恨才子憐花思匪夷花亦相依如于帛
朝々分與滿瓶水每枝一老魂一飛乃聚枯蘖手自束廿四番名仔細錄詩人會葬古道場
縱不玉棺死非辱詩淚洒成瘞紅篇玫瑰三尺白衰然果是芳魂得解脫淨土重開五色蓮
竹下旋 芳魂葬處草芊綿粉盡紅消風悄然身後自今三尺石生前憶昨半瓶泉幸教名士
鐫佳句喜向禪門寄墓田休笑囊空無酒酹朝來釀得有青錢竹田憲 寂小墓門臨晚開恰
如埋玉向青苔明朝更写色空語爲汝應焚寄夜臺菊淡小史倍滌瓶換水護芳魂抱枝嘆見花
憐影瘦香囊春事已闌珊欲捨未能愛惜別三尺土葬無棺 黃泥三尺葬無棺粉止酸綠
狂歎雨撼風瀾籬招學纏綿賴使芳魂飛化蝶來枕土入儂眠水精簾下龜夢研山人圖
天保甲午八月朔埋瓶花枯枝一束於黃薇玉浦之千光寺側謀立斯石各錄詩若詞代銘

原四久三十介幸十刻

